

## アジア主義と現在に引き継がれる問題

08K047 住安 詩緒里

私は今回の課題を、「アジア主義の系譜とその問題点について述べなさい」とすることにした。私は「アジア文化論Ⅰ」の講義中、この「アジア主義」について考えている時、この思想が現在の世界の中にも十分存在していることに気がついた。そこから、この思想についてより理解を深めたくなったからだ。アジア主義とは、どのような思想であり、どのような問題をはらんでいるのだろうか。足がかりとしてまず実際のアジア主義者のあいだで、考えや行動にふれ、そこから問題を探っていきたいと思う。

ここでは私が文献を読んでいて、比較的思想や行動や立場が分かりやすい人物を三名挙げる。なお、アジア主義としては近代の歴史の中でさまざまな思想、行動があり、ここに記述した限りではないこと、また、ここにあげた人物のみが記述された思想を持っていただけではないことを、ここで明記しておく。

まずは、頭山満である。頭山は国家主義組織ともいえる玄洋社の頭目として知られている。彼は「東洋に仁義道德の理想国を築き上げる」、「日本は道義の中心とならなければならない、それが日本の使命である」、「日本皇道の精神をまず東洋に布き、更にこれを全世界に推し拡め、「億兆一心世界一家」の理想を実現することを、吾等日本民族の天より賦せられた大使命として邁進せねばならぬ<sup>1</sup>」と、自作の著書に書いている。彼の思想は日本至上主義であり、その日本の精神や考えがアジア諸国を変え、ひいては連合し、やがて世界が日本を中心に一つにまとまっていくというものだ。また、これを成し遂げることが日本に課せられた使命であるともいう。そこには日本という国家、国民への、アジア諸国の国家、国民に対する優越を感じざるを得ない。私はこれを見ると、「お前らより勝った日本が世界を平和にしてやるんだぞ」という世界征服のようではないかと考える。日本を中心として他国を従え平和をつくり、ゆくゆくは世界が一つになり平和になるという帝国主義的なシナリオが見えてくるように思われる。

次に、中野正剛である。彼はイギリスに留学する際、上海やシンガポール、マラッカ、ペナンでその土地の人々が欧米列強に支配されている様子を目の当たりにし、ショックを受け、「今日の文明は奴隷を認めない。しかしこのように東洋に住む人々が白人の奴隷となっているのは、それは彼らに「国として弱い」という罪があるからだ」と記した。これはつまり、「欧米列強は奴隷を認めないが、しかしなおも支配され、奴隷として扱われているのは、自らの国が弱いからだ。自業自得である」、ということだ。彼がこの惨状を見て憤慨しているのも確かなのであるが、私はこの考えは非常に危険であると思う。彼が欧米より力の無い自国も気をつけねばならないと考えたのか、日本が強国という考えがあるから、他国を弱いと見たのか。これについては定かではないが、私はおそらく後者なのではないかと考える。なぜなら、彼の思想は時を経るごとに「欧米列強に抵抗する為にアジアの人々が日本を中心として団結するべきだ」というアジア主義に変わっていったからだ。これはアジア諸国を、自国の日本より弱いと見る目があったからに他ならないのではないかと。この考えは後に重光葵によって「大東亜共同宣言」として発せられ、彼はこれを第二次世界大戦において日本が戦う目的にまで押し上げた。これが後の大東亜共栄圏と日本のアジア植民地化という考えに発展していくものであろうと思われる。

宮崎滔天は、先に挙げた三人とは少し異なるアジア主義者であるように感じる。それは、彼が辛亥革命の遂行を助けることに尽力し、何より「日本人は支那を低く見すぎている。この人々は決して低く見るべき

人々ではなく、むしろ欧米よりもおそれるべき存在である」としているからだ。玄洋社の頭山満や犬養毅も辛亥革命のために力を貸したというが、宮崎ほど中国を高く評価していない。また、彼は日本のアジア主義者の中でも中国人から信頼された数少ない人物である。彼の思想には、「欧米のアジア主義に抵抗するためには、日本でなく支那で革命を起こし、日本に波及させ、更にアジア、世界に波及させる」というものがある。革命の影響のもとを中国に求めたその根底には、中国への高い評価があったのだ。

さて、以上三人のアジア主義者を見てきたが、この三人には共通する点と、そうでない点がいくつか見られる。まず、三人に共通する点は、「欧米列強に対抗するためには、アジアが一つにならなければならない」という考えである。これが、アジア主義における大前提の思想のようである。さらに各人にはこれに付随する考えとして、「その中心が日本であるべきだ」という考えと、「中国から革命を起こし、波及させるべきだ」という考えがある。さらに前者には、「日本はアジアの内で最も優れているから、アジア諸国はこれに従うべきである」という考えが付随する。また、宮崎以外は、みな日本よりもアジア諸国が劣っているという考え方をもっているようである。アジア主義者の中で中国でも人気があった人物は数えるほどしかいないことなどを見ると、その思想が強いにせよ弱いにせよ、これが日本の世間一般の考え方であったのではないかという風にも取れる。

さて、次に明治から昭和にかけての歴史と、上述の思想をさらにからめて考えてみたい。文献によれば、アジア主義のそのはじめは、国防の観点からの出発であったようだ。「南下を進めるロシアに中国を取られてしまつては、いずれ日本も危ないかもしれない」という考えが、明治の世にはあったようである。明治の世の中ではアジアが欧米列強の植民地とされており、中野正剛のように現地の惨状を目にし、憤慨した日本人もいる。そこから、やがて「欧米列強の植民地主義に対抗するためには、アジアが一つにならなければならない」という連帯意識が中心となった考えに広がっていったのではないか。しかし時代の流れから、日本はアジアで最初の立憲国家となり、日清戦争、日露戦争に勝利し、韓国を併合するなどして力をつけてしまった。ここから、日本は傲慢な道に走ってしまったのではないか。つまり、明治の世の中での出来事が、「日本を他のアジアよりも勝り、欧米列強にすら劣らない力がついた」と見ることへの理由づけができる確証を与え、「西洋のもつ近代性と、アジア文化が集約された国である日本が中心となって、その精神をもってアジアが結束し、欧米列強に抵抗するべき」という考えが出てきたのではないだろうか。さらに欧米に抵抗するという考えにも、「自分たちがここまで力をつけたのだから、欧米列強にだって勝てるだろう」という日本の驕りが見えるように感じる。やがて力をつけ、豊かになっていく日本は、いよいよ自らが欧米列強にそうされかけた様に「国家の膨張」を理由として、様々なものを国外に求めていく。福沢諭吉が書いた「脱亜論」のごとく、その姿勢を欧米列強に真似てしまったのである。そこででてくる思想が「大東亜共同宣言」であり、「大東亜共栄圏」である。近代の歴史の中で、「欧米列強に対抗するためには、アジアが一つにならなければならない」と語る「アジア主義」は、その実は日本に必要な物資をアジア各国に求めるという、植民地的な思想として、結実してしまつたのである。

ここまでアジア主義についてみてきたが、その問題は、私はひとえに日本のアジア諸国に対するオリエンタリズムにあると考える。日本は己の力に任せて、アジア諸国が望んでもいないのに、望んでいと決め付けて、アジアの団結を目指した。中国や朝鮮からは独立を求める運動があつたにもかかわらず、その声を黙殺し、尊い日本がアジアを支配することが、日本国民の使命であると考えていた。その結果、この思想をどんどん自分たちのいいように捻じ曲げ、最終的には対欧米列強のふりをした帝国主義思想となつていった。だから大東亜共栄圏は歓迎されなかつた。宮崎滔天のように目的のため互いを知る努力を行い、互いを認める力があつたなら、日本からもしくはアジアの一方からではなく、双方からのアジア主義であつたなら、また違う歴史の結果があつたのかもしれない。

さらに現在においても同じことが言えると思う。国々が一つにまとまるということは、その国々が必要として行われるべきことであると私は考える。一方からであっては、それは吸収に他ならない。現代でも日本の首相が東アジア共同体をつくる、などと言っていたが、これも一方的な思想であっては、またアジア主義、大東亜共栄圏の思想を繰り返すだけである。私たちは、何事においても自己と他者の理解の努力を惜しんではならない。私たちの周りにも、オリエンタリズム、アジア主義に似た考え方はたくさんあるだろう。何か物事に対する時、その考えを一度俯瞰してみて、理解するのに足りない知識を補う必要がある。そうして、もう一度その考え方を見直すことが求められると私は考える。

## 註

1 頭山満 他『アジア主義者たちの声（上）』書肆心水、2008、p.73

## ●参考文献

頭山満 他『アジア主義者たちの声（上）』書肆心水、2008

宮崎滔天 他『アジア主義者たちの声（中）』書肆心水、2008

松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波現代文庫、2000

岡本幸治『MINERUVA 日本史ライブラリー⑤ 近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、1998

五味文彦・鳥海靖 編『もういちど読む山川日本史』山川出版社、2009

(担当教員 松本 ますみ)